

称号及び氏名 博士（臨床福祉学） 堀 清和
学位記番号 甲第4号
学位授与の日付 平成21年3月25日
論文名 「高齢者のケアにおける音および音楽の効能
高齢者の視点に立脚したケアを目指して」

論文審査委員 主査 南 哲
副査 太田 義弘
副査 柳井 勉

論文要旨

論文の概要

1 はじめに

本論文は、現在、医療や福祉の場で広く行われている音楽療法の、精神医学的な視野や発想に偏り、その結果として、利用者、とりわけ高齢者を「問題を抱える弱者」として捉える、治療のみを目的としたケアが主流となっていることに対して、利用者の視点に立脚したケアのあり方を目指すべく、高齢者を対象とした音楽療法の課題解決を目的としている研究である。

2 本論文の構成

序章

- 1 はじめに
- 2 問題の所在と仮説
- 3 研究の目的と意義
- 4 方法と各章における高齢者の定義
- 5 本論文の構成

第1章 高齢者支援と「音楽療法」をめぐる課題

- 1 ケアの意義と課題の位置づけ
- 2 高齢者支援における音・音楽を用いたケアの有用性
- 3 高齢者支援における音・音楽を用いたケアの課題
- 4 高齢者の視点に立脚した音・音楽を用いたケア
- 5 本章で扱った研究の広がりと限界

第2章 音および音楽を用いたケアの定義と分類

- 1 歴史的背景
- 2 先行研究の検討
- 3 「音楽療法」における課題
- 4 音・音楽の分類に関する考察
- 5 本章で扱った研究の広がりと限界

第3章 実験研究の意義と研究仮説

- 1 実験研究の意義と仮説
- 2 先行実験研究の検討
- 3 自律神経機能のメカニズムと実験方法の妥当性
- 4 本研究で用いた評価手法の臨床福祉実践への応用
- 5 本章のまとめ

第4章 音が生理的側面に及ぼす影響と個人差の検証

- 1 はじめに
- 2 実験方法
- 3 結果
- 4 考察
- 5 本章のまとめ

第5章 音と音楽がもたらす生理的効果の比較検証

- 1 はじめに
- 2 実験方法
- 3 結果
- 4 考察
- 5 本章のまとめ

第6章 実践事例研究

- 1 医療施設における実践事例研究の概要
- 2 Aさん(71歳)男性の事例
- 3 Bさん(65歳)女性の事例
- 4 Cさん(68歳)女性の事例
- 5 本章のまとめ

終章 本論文の成果と今後の展望

- 1 高齢者を対象とした「音楽療法」をめぐる仮説および課題の整理
- 2 文献研究によって得られた成果
- 3 実験研究によって得られた成果
- 4 実証研究によって得られた成果
- 5 今後の展望と課題

上記の内容で、調査研究として必要とされる要件を満たした構成となっている。

3 博士論文審査結果の要旨

序章では、問題の所在、研究の目的と意義、方法、そして、論文の構成について述べている。まず、現在の音楽療法が、医療のみならず福祉の領域でもその活動の範囲を広げているにもかかわらず、多くの研究や実践が精神医学の視野や発想に基づいて行われ、その結果、利用者の視点を軽視する傾向にある問題などの指摘から始まっている。とりわけ、この傾向は、高齢者を対象とした実践に多く見られ、高齢者に対する音楽療法の導入が広まりつつある現在、今一度、利用者自身の視点に立脚した支援の重要性を述べている。

本論文では、現在の高齢者に対して行われる音楽療法をめぐる様々な問題が、対象者を中心とする視点の欠如、明確な定義や分類法の不在、適切な評価の手法が確立していないこと、に起

因しているものと仮定し、これらの仮説を検証した上で、その課題の克服を試みている。また、本論文では、従来の音楽療法が医学的な視座のみに偏っていることへの問題意識から、治療のみに関心を集める「療法」からの脱却を試みるため、利用者の視点に立脚した音楽療法については、「音楽を用いたケア」という呼称を用いている。

第1章では、序章で提示した仮説のうち、「対象者を中心とする視点の欠如」、とりわけ高齢者を対象とする音楽療法の問題について検証を行っている。

まず、音楽療法とその隣接領域におけるケアの目的を比較する中から、音楽療法の実践におけるケアがソーシャルケアとしての特徴を有していることを指摘している。しかしながら、従来の音楽療法の研究が、医療的なケアにばかり関心が集まっており、実践と研究に乖離があることも問題として指摘している。次に、本論文で研究の対象となる高齢者のケアについて、先行研究から高齢者の特性、医学的視座に代わる Successful Aging からの発想について検討し、従来の治療を中心とする音楽療法から脱却した高齢者支援の前提となる視野や発想について述べている。

次に、これらの前提を踏まえて、音・音楽を用いたケアが高齢者の生活支援においてどのような役割を果たし得るかについて考察し、身体的側面、精神的側面、社会的側面、QOLの向上に有用であることを、先行研究の検討から明らかにしている。

一方、これらの有用性に対し、現在行われている高齢者を対象とした音楽療法の課題として、病理モデルに基づく支援、定義と評価の手法が整理されていない点、高齢者への偏見に基づく支援、の三点を指摘している。

これらの課題を踏まえ、情緒的な面から的高齢者の生活支援と音楽療法をめぐるこれらの課題をどのように克服すべきかについて、ソーシャルワークの先行研究を基に考察し、高齢者の視点に立脚した支援の構想を提示している。

本章では、仮説の検証と、検証によって明らかにされた課題を克服するための提言が行われており、同時に、現状の制度的な制約に伴うこの提言の限界についても言及している。

第2章では、音楽療法が抱える問題点、仮説「明確な定義や分類法の不在」の検証、そして研究及び実践に有用な分類法の提示という課題に焦点を当てている。

国内外の音楽療法の歴史的背景を考察する中で、音楽療法の理論が主として精神医学の視点に基づいて発展してきたことを明らかにしている。さらに、人間と環境からなる生活のうち、特に「人」の側面への支援において、実践としての音楽療法の固有性があるのではないかと指摘している。

次に、音楽療法の歴史的背景とその固有性を踏まえて、現在の音楽療法の定義、目的、理論、実践の方法、評価手法について文献研究を通して整理している。

その結果、音楽療法の定義や目的が明確に定まっていないこと、音・音楽の分類方法が整理されておらず、選択の基準が曖昧であること、音楽療法士の公的な制度導入への動向に伴い、医学的な視点に基づく研究や実践が主流となっていることを課題として指摘している。

さらに、分類法が未整理であるという課題を克服するために、音楽学および音楽療法の先行研究から、実用的な音・音楽の分類方法を提示している。

そして、仮説の検証と課題の明確化、克服のための提言という一連の考察過程の中で、実験研究および実証事例研究の基礎となる資料の詳細な検討を行っている。

第3章では、仮説「適切な評価の手法が確立していない」という点について検証を行い、第4章および5章で行う実験研究の意義と実験研究の仮説について述べている。

現在行われている音楽療法の研究が、医学的根拠に基づく研究を重視するあまり、個人の多様性

を軽視する傾向にあること、個人差や年齢差を軽視し、若年者を対象にして行われた研究成果からこれが高齢者にも適切であるとしたケア内容が組み立てられていることなどを問題点として指摘し、実験研究による客観的なデータに基づいて、個人の多様性を軽視する現在の方向から個人の多様性を尊重する方向に転換する必要性を述べている。

その上で、高齢者の生理的側面に音・音楽が有用であること、音・音楽の種類による効果の差異があること、効果に個人差があること、現われる効果に聴取環境による影響があること、の四点を実験仮説として設定し、これらの点を科学的に検証することで、個人の多様性や高齢者の特徴を視野に入れた音・音楽を用いたケアのあり方を考察しようと試みている。

さらに、音楽療法の実験研究に関する詳細な文献研究を通して、臨床の場でも応用可能な評価指標の検討も行われており、検討の結果、自律神経機能の評価が有用であると述べている。

第4章では、前章で設定された実験仮説を検証するべく、自律神経機能を指標として若年者と高齢者の音刺激および視覚刺激との併用に対する生理的反応の比較を行なっている。

60歳から69歳の健康な高齢者を対象として、自律神経機能を指標とする実験研究を行い、得られた結果を考察し、さらに、若年者を対象とした筆者の先行研究との比較検証もしている。

実験研究によって得られた結果として、音刺激が高齢者の自律神経機能に影響を及ぼすこと、年齢による差が著しく個人差があること、その効果には視覚刺激の有無も影響し、音声メディアと視覚メディアを併用したケアに根拠があること、を確認している。

第5章では、60歳から70歳の健康な高齢者を対象として、第4章の結果を踏まえて、音楽を用いた実験仮説の検証を行ない、前章と同様の結果が得られ、さらに、一般的に良いとされるクラシック音楽には個人差が大きいことも確認している。これらの実験結果から、高齢者への音・音楽を用いたケアでは、年齢の特性、個人の特性を踏まえて、その人に適した支援を行っていく必要性を示唆している。

第6章では、文献研究および実験研究で得られた知見を基に、医療施設において実際に音楽を用いたケアを行ない、これらの知見が実践で活用可能であることを実証するとともに、実践においてどのような課題があるかについても、併せて検討している。その結果、音楽を用いたケアが、医療施設における実践においても有効であること、対象者の視点に立脚し、その人に適切な支援を対話によって決定していくことがケアの実感を得る上で重要であること、そのための一つの方法として、効果をビジュアル化し、一判断材料として用いる手法が有効であること、を確認している。

終章では、本論文の総括を行ない、研究による成果と今後の課題を述べている。文献研究を通して課題を焦点化し、実験研究により従来の定説を批判的に検証し、さらに実践を通して本研究の知見を活用することで、序章において提示された従来の音楽療法における課題の克服を試みたことを述べている。

研究の成果として、次の3点が挙げられる。

- (1) 老年学およびソーシャルワークの先行研究から、高齢者の視点に立脚した生活支援の構想を提示し、音楽学および音楽療法の先行研究から、実践に活用可能な音・音楽の分類法の提示を行なっている。このことにより、生活という視点から、高齢者の支援で必要とされるケアをより適切に提供することが可能となり、今後の高齢者に対する音・音楽を用いたケアの実践・研究に大きく貢献するであろう。
- (2) 実験研究により、従来の音楽療法研究を批判的に検証を行ない、年齢差や個人差があり、個人の特性や嗜好性が重要であることを実験結果から確認している。このことにより、従来の音楽

療法における実践でしばしば見受けられる画一的なケアに警鐘を鳴らすことが可能となるであろう。

- (3) 本論文で提示された支援構想や分類法、測定手法が実践においても有用であること、そして、これらの知見を診断の手法としてではなく、対話を通してケア内容を決定する際の一判断材料と位置づけることで、生活からの高齢者支援にも活用することが可能であることを示唆している。

博士論文審査結果の要旨

本学位申請論文は、音楽療法における課題を克服するために、ソーシャルワーク、老年学、音楽学、音楽療法の先行研究における理論的枠組みを基盤としつつ、従来の研究における問題点を丹念に検証し、高齢者の生活の視点に立脚した実践に応用可能なケアのあり方を提唱している。単に、従来の研究における問題点を指摘するだけに留まらず、医療施設における実践を通して、研究の成果を応用し、その有用性と課題を検討しており、今後の高齢者社会福祉施設における音・音楽を用いたケアの発展に大きく貢献するものと考えられる。

1 研究の目的

本学位申請論文は、

- (1) 従来の精神医学の視点からだけではなく、高齢者の視点に立った支援のあり方を考察し、その必要性和課題を明確化すること、
 - (2) 音楽学的見地から、音および音楽の分類法を整理し、高齢者のケアの実践に有用な選択基準を提示すること、
 - (3) 従来の量的研究では軽視されてきた「対象者に現れる効果の多様性」という観点から、音・音楽がヒトの生理機能に及ぼす影響について、客観的な指標を用いて評価し、実験データから音・音楽が高齢者にもたらす一般的効果とその多様性を明らかにした上で、実践を通して個人の多様性を尊重したケアの必要性を示すこと、
- を目的としている。

2 先行研究について

本学位申請論文では、ソーシャルワーク、老年学、音楽学、音楽療法に関する国内外の文献を幅広く紹介しており、丹念な先行研究の考察を基にして、研究成果に結び付けている。第1章では、老年学の先行研究から高齢者の特性を明らかにした上で、ソーシャルワークの視野と発想から、従来の音楽療法における課題の克服を試みている。また、第2章では、音楽学と音楽療法の先行研究を整理することで、克服すべき課題を明らかにし、実践に活用可能な分類法の整理を行っている。そして、第3章では、実験による従来の定説を批判的に検証するべく、実験研究に関する、緻密な先行研究の検討を行ない、実験研究および実践における測定手法の妥当性を裏付けている。

3 論旨の展開

高齢者を対象とした音楽療法の課題を克服するために、本研究では以下の過程を経て論旨を展開している。

- (1) 文献研究による課題の焦点化と新たな支援構想および音楽の分類法の提示
- (2) 実験研究による従来の定説への批判的検証
- (3) 文献研究および実験研究で導き出された知見の実践における活用とその有効性の実証

4 研究成果とオリジナリティ

本研究では、従来の音楽療法が精神医学的な観点からの支援に偏向しているのではないかという仮説を基に、精緻な文献研究を通してその課題が明らかにされ、実践に活用可能な支援構想と音楽の分類法を提示している。そして、実験研究によって、音・音楽に対する反応が高齢者と若年者では著しく異なっていること、個人差が大きいこと、聴取する音・音楽や視覚刺激の有無によって反応が異なることを明らかにしている。このことにより、若年者を対象とした研究成果を無批判に高齢者へのケアに援用し、個人の多様性よりも一般的な効果の検証にのみ関心を集めてきた従来の音楽療法研究に対して再考を促すための資料を提供することが可能となった。また、音声メディアと視覚メディアを併用し、有効に活用する可能性についても、科学的な根拠をもって示している。そして、実践を通じた事例研究では、精神医学的な観点からではなく、高齢者の生活という視野と発想を基に実践を行ない、科学的データを対話を通してケア内容を決定するための一判断材料に位置づけることで、病理モデルから生活モデルへと脱却する試みをしている。これらの点に、従来の音楽療法研究と一線を画した本研究の独自性が窺える。

5 内容全体への評価

- (1) 本研究では、高齢者の生活という発想から音・音楽を用いたケアを考察し、病理モデルに基づく画一的なケアからの脱却を試みられている。高齢者の生活を視野に入れた支援構想や具体的な音楽の分類法が提示されることにより、今後の音・音楽を用いたケアの実践および研究の大きな指針となるであろう。
- (2) 実験研究によって、音・音楽への反応に個人の多様性、年齢差、性差があることが明確に示されており、音楽がもたらす一般的治療効果に重きを置く従来の研究に警鐘を鳴らすことが可能となるであろう。また、研究成果を複数の学術誌に投稿しており、研究によって得られた知見を積極的に外部に発信することで、具体的な課題解決への道筋をつけようとする姿勢は高く評価できる。
- (3) 科学的データの活用法を、実践を通じた事例研究で示しており、客観的な手法で得られたデータを絶対的な評価として用いるのではなく、一判断材料として捉えることで利用者の実感へとつなげることができると指摘している。支援の科学性と支援効果の実感の両立を目指すための一つの方法を提示することで、今後、音・音楽を用いたケアが真の意味で有効活用される上で、大きなヒントを与えるものとなるであろう。

6 今後の課題

本研究の今後の課題として、以下の点を指摘したい。

- (1) 音楽療法の領域では、現在、音楽療法士の公的制度の導入が検討されているが、本研究で提唱

された支援構想についても、今後、制度の変化を踏まえて更なる検討を行う必要がある。

- (2) 音楽療法の公的制度化導入に伴い、治療効果の科学的検証を偏重する傾向が強くなっているが、本研究で提唱している支援構想を敷衍するためには、研究および実践を通して、引き続き、個人の多様性を尊重するケアの重要性を積極的に外部に発信し続けるとともに、音楽療法士の養成カリキュラムの中にも社会福祉に力点を置いた教育の重要性を訴えていく必要がある。
- (3) 本研究では、医療施設における実践を通して、研究で得られた知見の有効活用法を検討しているが、従来の研究および実践の批判を通じた音楽の効能の検証が研究の焦点となっている。人間中心的な支援に目標を置いた実践へと結びつけるためにも、今後、社会福祉関連施設等でのような支援において活用できるのかという点についても、さらなる検討を行う必要がある。
- (4) また、本研究では、在宅高齢者の個別支援における実践を検証しているが、グループワークの中での活用方法についても、引き続き研究が行われる必要がある。
- (5) 本研究では、高齢者の特性や個人の多様性を視野に入れたケアの重要性を指摘しているが、どのようにして高齢者の生活を捉えていくのか、そして、どのように適切なケアを提供していくのか、その方法論を追求していく必要がある。

審査結果

本審査委員会は、堀清和氏提出の学位論文の査読に基づき意見交換、評価し、臨床福祉学の視野と発想から音楽療法に新しい道を拓く優れた研究であると評価した。2009年2月9日に行われた公開の最終試験における口頭試問の結果を加えて判断し、博士（臨床福祉学）の学位を授与するにふさわしいとの結論を得た。